

刊行によせて

神奈川大学日本常民文化研究所は、戦後間もなく行われた漁業制度資料調査による史・資料 25 万点を含む膨大な資料を所蔵し、また民具研究を中心に長年にわたり「常民」、すなわち庶民の生活文化に関する多方面の調査・研究を行ってきました。その実績が評価され文部科学省の 21 世紀 COE プログラムに採択され、「人類文化研究のための非文字資料の体系化」（2003～2007 年度）の拠点となり、その後、事業は同研究所に付置された非文字資料研究センターに引き継がれています。さらに、2009 年度には国際常民文化研究機構として文部科学省から共同研究拠点に認定され、5 年度にわたる事業を推進することになりました（「平成 21 年度人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」、現「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」）。

機構設立の目的の一つは、日本常民文化研究所の創設者・渋沢敬三（1896～1963）の「ハーモニアス・デヴェロップメント」精神を受け継ぎ、国内・外の研究者コミュニティに広く「常民文化」研究の史・資料と場・機会を提供し、その学際的・国際的展開をはかり、研究分野を拡大、深化させることにあります。そのために、当該学界・研究者コミュニティの意見の反映をはかり学外の研究者が過半数を占める運営委員会を組織し、その論議のもとに、5 つの研究分野——1. 海域・海民史の総合的研究、2. 民具資料の文化資源化、3. 非文字資料（画像・身体技法・景観）の体系化、4. 映像資料の文化資源化、5. 常民文化資料共有化システムの開発——を設定し、応募条件をホームページ上に公開するなど広く年度ごとに公募を呼びかけ、プロジェクト型共同研究を進めることにしました。その結果、上記の 5 研究分野に応じ下記の 8 課題、

- 1 - 1 漁場利用の比較研究（研究代表者 田和 正孝）
- 1 - 2 日本列島周辺海域における水産史に関する総合的研究（研究代表者 伊藤 康宏）
- 1 - 3 環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究（研究代表者 後藤 明）
- 2 - 1 民具の名称に関する基礎的研究（研究代表者 神野 善治）
- 2 - 2 東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史（研究代表者 角南 聡一郎）
- 3 アジア祭祀芸能の比較研究（研究代表者 野村 伸一）
- 4 アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象（研究代表者 高城 玲）
- 5 第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学（研究代表者 泉水 英計）

が設定され、80 人余の共同研究者がつどうことになりました。研究代表者には神奈川大学以外に所属する最適任者が選任されましたが、4 と 5 は、日本常民文化研究所が所蔵する資料を直接扱い、諸権利関係も存在するため神奈川大学の教員が任じることになりました。

本書は、そのうちの、4「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」（研究代表者 高城 玲）班の研究成果報告書（資料編）となります。

日本常民文化研究所には、主に 1930 年代に渋沢敬三らアチックミュージアムのメンバーによって撮影された各地の映像フィルムとスチール写真が所蔵されています（アチックフィルム・写真）。通称・高城班は、その「アチックフィルム・写真」を対象に、①モノという物質文化の問題、②モノと人との関係性（特にモノを介した身体技法）の問題、③異文化（自文化）表象の問題の 3 つの課題を文化人類学・民俗学・メディア表象の観点から考察することを目的としています。また、国際

常民文化研究機構全体のデータベース整備事業と連携し、「アチックフィルム・写真」という映像資料の文化資源化の可能性を探るという目的も合わせ持ち、フィルム・写真の整理とともに、撮影された現地で上映会を開催し、現在保持されている記憶を掘り起こす調査も進め、新たなデータの蓄積にも努めてきました。

高城班の研究成果報告書は資料編・論文編の2冊を予定しており、本報告書では資料編として薩南十島（鹿児島県十島村の口之島と中之島）関連のアチック写真を中心に掲載いたしました。現地で行われた上映会では、島民の半数に近い方が参加してくださり、中には、70年以上前の親族・知人やそれに似た人を写真やフィルムのなかに見つけて歓声をあげるような場面に接することもあったといえます。

限られた調査・研究条件のもとで作業に当たられた諸氏に、この場を借りて改めて謝意を表したいと思います。

2014年3月吉日

神奈川大学日本常民文化研究所所長
国際常民文化研究機構運営委員長

前田 禎彦